
仕返 しかえし

百合茶

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仕返 しかえし

【Zコード】

Z8263A

【作者名】

百合茶

【あらすじ】

俺は米沢が嫌いだ。見るとむしゃくしゃする。でも、こんな仕返アリかよ？

(前書き)

始めの3行が余計だつたんで、修正しました。

「おい！米沢！」

ヤツが振り向くのを確かめて、俺はヤツの体育館シューズを顔面めがけて投げつけた。

「痛てつ！何すんだよ！？」

米沢が右肩をさすりながら顔をしかめる。

ちつ。外しちまつたか

「倉本、口聞かない約束じやなかつたのかよ？」

「別に俺はおまえに用もクソもねえよ。」

おまえ見るとむしやくしゃするんだよ

そう、今、俺と米沢は喧嘩中だ。もう片方の体育館シューズもぶつけて、俺は学校を後にした。

家の前の三叉路に差し掛かった頃だ。信号待ちをしていると、後ろから何かが頭にぶつかった。ゴンッと言づ音とともにドサツと足元に落ちる。マンガ本だった。

「これ、俺が貸したマンガだぞ。こんな返し方アリかよ？」

「仕返だ。」

マンガが飛んできた方向を見ると、勿論そこには米沢がいた。マンガは不運にも今朝できた水溜まりに落ち、開いたページが古新聞のように灰色がかっている。

「仕返や。」

米沢はもう一度呟いて、ふふんと笑った。そう、こいつの冷笑が俺は嫌いだ。

信号が青に変わった所で、俺は古新聞同然のマンガを拾って飛び出した。横断歩道の真ん中辺りで振り返り、普通に道を渡つてくる米沢にマンガを投げつけた。

「うげつ！」

今度は見事顔面に当たり、米沢は袖で顔を拭つてマンガを踏み潰した。

「倉本っ！」

米沢が怒りに顔を歪まして掴みかかる。

ヤバイ

米沢より10cmも背の低い俺が胸ぐらでも掴まれたら、黙つて殴られるしか道はない。俺はとっさに身を屈めて米沢の腹に頭突きを一発お見舞いした。よろめく米沢をドンッと押して、そのまま振り向きもせずに突っ走る。

路地に入つても俺は走り続けていた。すぐ後ろから米沢が追い駆けてくるようで、もう必死だつた。家へ入れば良いのだが、鞄から鍵を探している間に捕まってしまう。仕方なく入り組んだ路地を進んで米沢を巻く事にした。

角を右に曲がり、直進50m程の従兄弟の家の開け放した玄関を目指す。いくら米沢でも見知らぬ他人の家へまで上がる事はないだろう。あと少し、あと少し。

と、そこで左側からトラックが走つてくるのが見えた。叔父さんのトラックだ。そのまま目の前を走り抜けようとしたその時、両肩に重りがかかった。

「捕まえた。」

米沢だ。とうとう捕まつた。しかもこんな所で…。

「ば、馬鹿放せっ！」

「ふん。仕返だよ。」

背中から米沢の笑いを堪えたような声が聞こえる。

ヤバイ、叔父さん、トラックを止めて！

必死にもがく俺を米沢は放さない。

「米沢！俺達死ぬぞっ！」

「死ぬのは倉本、おまえだけさ。俺はなあ…」

米沢の冷笑が浮かぶ。トラックがようやく気付いたのか、ブレー

キ音が響く。ヘッドライトが眩しい。強い衝撃の後、生暖かい液体が下水溝に流れるのを見た。

「倉本、俺はなあ：さつきの三叉路で信号無視したタクシーに撥ねられたんだよ。だから仕返せ。分かるだろ？」

: END :

(後書き)

最期まであつがといわざりこました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8263a/>

仕返 しかえし

2010年10月9日13時37分発行